



# ピッポ新聞

2008  
3  
No.229

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

## ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail [itoh@pippo.co.jp](mailto:itoh@pippo.co.jp)

### 山里からの便り

自然教室セブリー舎 佐久間雅哉

### 冬の山

### チェーンソーとシヨウウビタキ

いよいよ三月。庭の梅もやっと咲き始めました。今年はずいぶん遅いですね。去年は暖冬で一月には咲いていましたから、さぞや梅も落ち着かないことでしょう。

さて、この冬は境界巡視の仕事が早めに終わったので、糸あやつり人形の材料にするために買った桐の木を伐倒をしました。杉林の中に十七本。桐は大きいもので胸の高さで直径三十八センチ、高さ十五メートル。多くは直径二十五センチくらいです。



上がルリビタキのオス・下はシヨウウビタキのオスで、いずれもツグミ科「野鳥」(阿部直哉・写真家の光協会 2650円 より)

倒すのに手間がかかりそうだし、スギ花粉が飛散する前にやってしまいたかったので、女房に手伝ってもらいました。

桐は広葉樹ですから枝がひろがっています。今回のように針葉樹と混植しているところでは、伐採時に100%周囲の木に引っ掛かっています。そこで、木に登って大枝を前もって切り落としておかなければなりません。危険性もたかくなるので、とにかく慎重を心掛けてやりました。

まず、倒す木が枯れていないか、幹に空洞がないか確かめて伐倒方法をきめます。次に伐倒方向をきめて、邪魔になる枝がどれか見えます。こうした観察をしてからハシゴやブリ縄を使って木に登り、枝を落とすのですが、樹上でさらに観察します。切り落とそうとした枝が自分の方に倒れてくることだってありますからね。思い通りに切り落とすためには隣の木に登り直すことだっていいと思います。

こうして頭上の作業が終わって、いよいよ伐倒です。じゃまな枝を下ろしたからといって油断はできません。セオリー通りに受け口を作ったチェーンソーを入れ、倒れはじめたらすみやかに避難。ですから、避難する方の地面はきれいにしておきます。倒れた衝撃で飛び跳ねそうな倒木があればどけておきます。

これは木の自重で倒すときです。ロープでひっぱって倒すときには、伐倒条件が悪い場合ですから、さらにいろいろ危険を予測して、ロープを引く人と息を合わせてやらなければなりません。最悪木に引っ掛かったときは木にどんな力

が掛かっているか解りませんから、あせらず、さらに慎重にことを進めます。

こん方法で七日間で作業を終わりました。四月になったら大雑把に製材して山から搬出します。これで一生分の、糸あやつり人形の材料の桐の木が確保できました。さて、私たちは七日間この杉林で忙しくやっていたわけですが、じつはこの杉林で忙しくやっていたのは私たちだけではありませんでした。

私たちは、最初はルリビタキに気付きました。ルリビタキは夏は標高の高いところにすんでいて、冬になると下の方に移動してきます。オスは青いのですぐわかりますが、メスは地味なオリーブ色で、私たちが見たのはたぶんメスだと思えます。この時期オスの若鳥もメスと似た色をしていますから正確にはどちらかわかりません。

次に気付いたのはジョウビタキです。この鳥はオスは黒く白い斑をもっていて、腹は赤茶色です。冬になると日本に渡ってくる私たちにはとても馴染みさんです。

このジュビタキ君、人なつっこいのでしょうか？ 私たちを気にせず、やたらくっついてくるのです。ロープやチェーンソーに留まり、なかなか可愛いやつです。ところが数日して、女房が「どうやら、あのジョウビタキはルリビタキを追っ払っているみたい」と言うのです。

確かによく見ると、この杉林に入っていると追いかけて回っています。どうやらここはジョウビタキのなわばりのようです。と言うことは、ひょうつとしてあのジョウビ

タキ、人なつっこいのではなく、私たちがテリトリーを犯す侵入者と見て嚇していると考えた方がよさそうです。

「なんだオマエたち！ 出ていけよ！」、チェーンソーやロープに留まるのも「何だこれは！ 邪魔だなー」といつているとしたらおかしいですよ。それはそれは、気付かずどうも失礼いたしました」

緊張感あるなかにも心なごむひとときでした。

## ねえ、この本読んだ

まずは、福音館書店の  
幼児絵本の新刊3冊

『いろいろおせわになりました』（やぎゆうげんいちろう・作 780円 福音館書店）



この絵本は、わらべうたの「おちやをのみにきてください」をテキストにしただけあって、絵本からリズムカールで楽しさがあふれてきます。やぎゆうさんのユーモラスな絵の世界もいかなく發揮されています。左側お

茶のテーブルがセットされているページ背景の色が、次に登場する人（動物？）の色を暗示しているのですが、色もとてもリズム的です。

『くまとりすのおやつ』（きしだえりこ・文 ほりうちせいいち・絵 780円 福音館書店）



ちいちゃい子の絵本は、簡素であることが大切な要素だと思います。

この絵本は文も絵もそれに適っている一冊だと思えます。くまとりすが木イチゴを見つけて、それを摘んで食べる。ただそれだけの物語ですが、文にも絵にも余分な表現はありません。大きなくまと小さなりすの対比も自然でユーモアさえ感じます。なんだか木イチゴばかりも食べたくなりしました。

『もりのおふる』（西村敏雄・作 780円 福音館書店）

この絵本のはじまりは、森の奥に大きな桶の「お風呂」がわいているところから始まります。おとなのあなたは「温泉でもあるまいし、桶のお風呂が森にあるわけないだろ！」などと、考えてはいけません。そこにライオンがやってきて風呂に入り、つぎに





『タンポポのわたげ』(多田恵子・監修) 470円 偕成社)

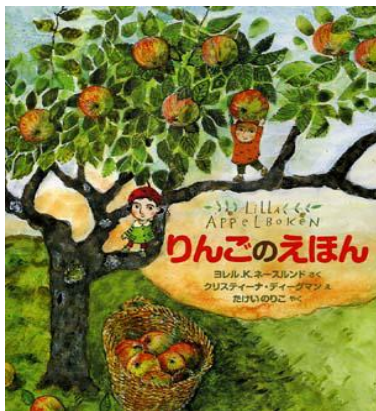
春です、春らしさを感じる 絵本3冊

バカしくなってしまう。それではこの絵本はなりたちません。もしそういう人が絵本を読む場合は、自分の幼かった時代の記憶を呼び覚ましてから絵本をお読み下さい。そうすればあなたもワキアイアイとしたお風呂の楽しさを子どもと一緒に味わうことができるのです。子どもは特に幼い子はそういうものなんです。日常の中でも子どもの心を時々思い出すと見えてくる物があるかも知れませんよ。



象がきてライオンの背中を洗ってやるので。さらにはワニが・・・、次々動物が登場します。ここであなたは大人の視点でこの絵本を眺めたら、矛盾点ばかりが目につきバカ

は今の時季はまだロゼット状です。でもそこから、小さな花が咲いているのもありますね。タンポポはもうすぐたちあがり、あつちでもこつちでも黄色い花が、春が来たことを報せてくれます。柔らかな葉はサラダやお浸しにして食べると、ちよつとほろ苦いけどこれも春の味です。さて、この写真絵本は、タンポポの花がどん一年を過ぎすか教えてくれます。特に綿毛が飛んでいって、その先ではどんな運命をたどるのか教えてくれます。タンポポまで育つのは少ないですね。

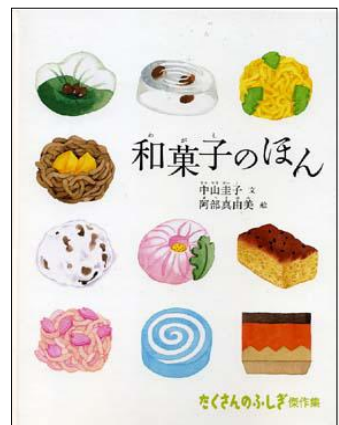


『りんごのえほん』(ヨレル・K・ネルソン・作 クリステイナ・ディーグマン・絵 たけいのりこ・訳) 1260円 偕成社)

5月連休はたいがい残雪の春山に行きます。

その途中、安曇野をバスで行くとき、いつもりんごの花が花盛りでとてもきれいです。この絵本はそれを思い出させてくれる。スウェーデンの家庭の庭にはりんごの木がたいがい植わっているそうです。見てきれいな食べ物、美味しいりんごの絵本です。

『和菓子のはん』(中山圭子・文 阿部真



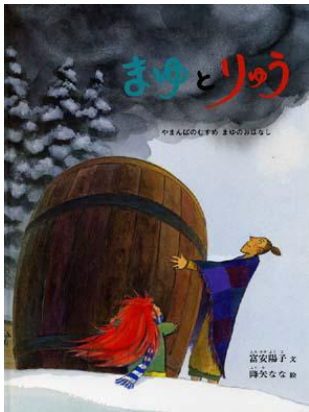
由美・絵 1365円 福音館書店) 春の舞い 野あそび ひとひら 花ぐもり

花いかだ 小蝶 これはみんな春の和菓子につけられた名刺です。そうなので。和菓子は日本の四季にちなんだ名前や色やかたちを模したものがいっぱいあります。この本はそんな和菓子のことが美しく紹介されています。和菓子の世界はとても優雅なのです。この絵本、いまピツポで売れている一冊です。

こどものとも傑作集の新刊3冊

『まゆとりゅう』(富安陽子・文 降矢なな・絵) 840円 福音館書店)

ある春の朝、やまんばかあさんが言いました。「まゆ、となり山を見てごらん」そこには雪がとけて「はるの、ちいさなりゅう」のかたちが出ていたのです。それが出る日には、毎年お客さんがやまんばのところへやってくるのです。さて



ルプス後立山連峰の「白馬岳」「五竜岳」「爺ガ岳」などの山の名前は、山の雪解けのかたちを里の人びとが想像してつけたそうです。「爺ガ岳」はおじいさんが種を蒔いている姿に見えることからついたのだそうです。これが出ると、里ではお百姓さんは種まきをはじめるといことです。人の暮らしと自然が結びついていたのでですね。この絵本も、もしかしたらそんなことが背景で生まれたのかもしれない。

『かえるをのんだととさん』(日野十成・再話 斉藤隆夫・絵 840円 福音館書店)



日本の昔話 ととさんはお腹が痛いので、かかさんに相談すると、かかさんはおしようにさまに聞けと言う。おしよさまは「そりや腹の虫のせい」だから、カエルを飲み込めと言う。ととさんがカエルを飲み込んだら、腹

痛は治まった。ところが今度はお腹の中でカエルがペタペタと歩くので気持ちが悪い。かかさまはまた和尚さまに聞けと言う。お和尚さまは今度は蛇をのみこめ……。つぎつぎと、とさまは飲みこんでいく、とう

とう最後には……。これは何とも滑稽で、ユーモアあふれるお話です。

『まじよのおとしもの』(油野誠一・作 840円 福音館書店)



こんなことが本当おこったなら、楽しいよね。ヒロミちゃん は、ある朝汚いほづきをみつめました。それはまじよのほづきのようでした。ヒロミちゃん

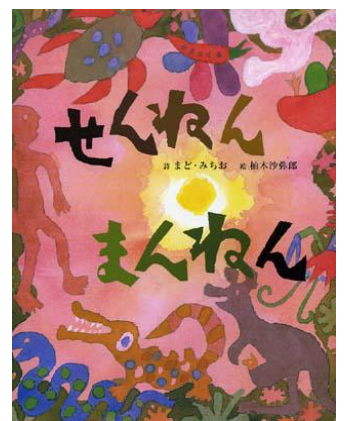
ふざけてほづきにまたがり「ふじさんのてつぺんへ」といったら、ほづきはびゅーんとびだして富士山のとつぺんへ……。君も古いほづきをひろつたら、ためしてごらんよ。もしかしてそれ飛び出すかもしれないよ!

### さて、最後は詩の絵本1冊

『せんねん まんねん』(まどみちお・詩 柚木沙弥郎・絵 1575円 理論社)

地球上で人間だけが生きていければいいなんて、いつからおもってしまっただろうか? わたしたちは、この地球上で一番エライのは人間だなんて、いつか考えるように

なっただらうか?



みたらどうだろうか。「ながいみじかいせんねん まんねん」をという地球の時間を思ってさ!

**不要の子どもの本買います!**  
お引越しなどで、蔵書の整理をお考えの方、ピッポ古書クラブがお手伝いいたします。

電話やメールで、ご連絡いただければお宅まで出かけます。(関東・中部など近隣都・県) 何処でも伺います。子どもの本だけでなく本や古い雑誌などもかまいません。ご一報ください。(ただし本によっては、お引き取りできない場合もございます) ピッポ古書クラブは、この春から子どもの本だけでなく、一般書・専門書や古い雑誌などの整理をお手伝いします。